

# 聖

## 太子

神主・奈良県立大学客員教授

岡本彰夫

AKIO OKAMOTO



おかもと・あきお  
1954 (昭和 29) 年奈良県生まれ。國學院大學文学部神道科卒業後、春日大社に奉職、春日大社権宮司 (2015 年退職)。奈良県立大学客員教授、宇賀志屋文庫庫長。著書に『日本人よ、かくあれ』(ウェッジ) など多数。

大師といえは弘法大師、行者といえは役行者、太子といえは勿論、聖徳太子である。

環濠集落で有名な、大和郡山市の稗田を訪れた際、賣太神社の禰宜・藤本眞喜子さんと話していたら、昔聖徳太子が来られた際、他の村は御飯を炊いておもてなしをしたが、独り稗田の村は、水に恵まれず稗を炊いて饗応せざるを得なかった。太子はこれを不憫と思し召され、秦河勝に命じて、廣大寺池を築造されたという。故にこの池水の水利は稗田が優先されると伝え、今も田植えが済むと、稗田は村の総代が二人、法隆寺の聖徳太子のもとへ御礼参りに行くのだそうである。これを承って、大和の風景の中には、今も聖徳太子が歩いておられるのだと感じた次第である。

『日本書紀』の推古紀には、「生れながらにして能く言のたまひ、聖智まします。壮に及びて、一に十人の訴を聞き、以て失たず能く弁へ給ふ。兼て未 然を知り、且た内教を高麗の

僧・惠慈に習ひ、外典を博士・覚智に学び、兼に悉に達り給ひぬ」との記述ある事から、超人的な太子に疑惑を生じ、果ては、聖徳太子不在説までがあらわれ、慣れ親しんだ「聖徳太子」の称号を教科書から削除するという昨今には、怒りさえ覚える始末である。聖徳太子は、諡ゆえに、厩戸皇子が先行されようが、千年に亘る称号を消し去るまでには及ぶまい。

日本書紀は太子没後約百年を経た、養老四(720)年に完成したとされるが、更に270年を経た正暦三(992)年に成立したと考えられている『聖徳太子伝暦』では益々太子は神格化されている。母君が金色の僧を夢見て懐胎され、厩の前で出産。二歳で東に向かつて合掌し、「南無仏」と唱えられる。これが「南無仏太子像」のおこり。幼い頃から類稀なる能力を発揮され、十二歳で来日した百済の日羅から救世観音だと拝礼され、二十二歳で摂政。二十四歳で八人の訴えを同時に聞き、二十七で甲斐国から献上の黒駒に騎馬し、富士山に昇り諸国を巡見。二十八歳で

天気より地震を予見、三十三で十七条憲法を制定され、三十五で『勝鬘經』・『法華經』を講讀、三十六で『法華經』を求めに小野妹子を衡山へ遣し(法華經に欠字があるため)、三十七歳で夢殿に入定して自らの魂を青龍車で衡山へ送る。四十七で妃に自らの六代の前世を語り、四十八で摂津から献じられた人魚を見て、不吉を悟り、同年病を得て、翌年諸臣と惜別の宴を催し、五十歳で妃と共に(妃は太子より一日早く)薨去され、河内の磯長の御廟へ埋葬される。(三骨一廟と伝え、太子の母君、穴穂部間人皇后と妃の昔岐岐美郎女も共に葬ったとされる。)こんな内容が伝暦である。

太子の召された「黒駒」は太子葬送のお供をして、墓前でいなくて倒れ、現斑鳩町の駒塚に葬られたと伝わる。また太子の愛犬は「雪丸」という白い犬で、王寺町文化財学芸員の岡島永昌氏の示教によると、寛政三(1791)年刊の『大和名所図会』には、太子がいたわられた飢人の墓(『日本書紀』)の上に

建立された、達磨寺の境内図に、小さな狗の石像を「こま塚」と誌し、『達磨寺略記』には、太子の愛犬は雪丸で、よく人語を解して経も誦し、臨終に至っては墓地の場所まで指定したと記録されている。また元旦には吠えるという伝承もあった様で、現在王寺町のマスコットキャラクターとしても活躍している。また寛文十一(1671)年刊の『太子伝撰集抄別巻』には太子の愛犬は白雪丸で、墓が郡山にあり「犬臥の岡」と呼ぶ記録があって、今も大和郡山市新木の

金魚の飼育池のまん中に、その塚が存在することを、岡島氏と一緒して確認したことがある。

かくの如く、太子の愛馬や愛犬まで信仰の対象となつているのは事実であり、太子に対する追慕の念がいかに強いかを思い知らされた。

弥陀一仏を拝礼の対象とする浄土真宗でも、開山親鸞上人の信仰を導いたのは、聖徳太子であり、太子への賛仰は厚い。

それに加え太子の予言とする『未来記』の存在が

あって、これによって動かされた人があり、歴史があり、日本人の心の中から千年に亘る太子への崇敬の念は禁じ得ることは出来難いのである。

近來太子の存在は疑うべき余地の無いことは明白とされているし、本年薨去千四百年を迎えることから、再度太子の偉業やまた、多くの人々の心の中に生きつづける聖徳太子への信仰を、再度認識してもらいたいと念願している。